

重修真書太閤記

八編
九

晴

家傳

和書門	
三四五	類
二六三	函
一三	架
四〇	冊

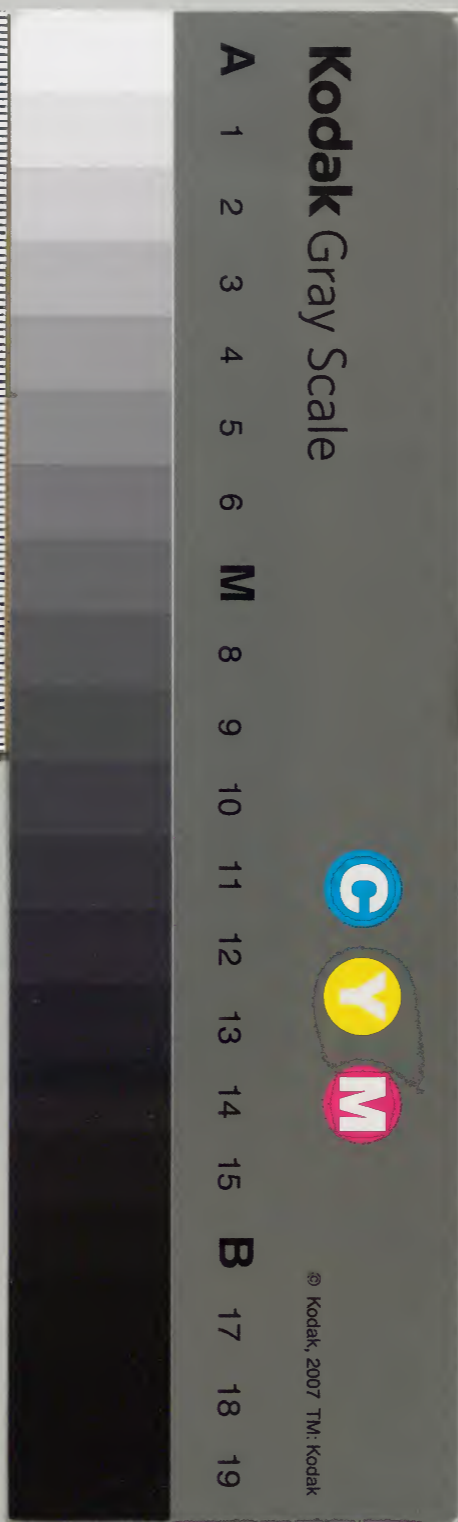
內閣文庫	
三四五	和書類
四〇五	冊
一四	架
一七	函

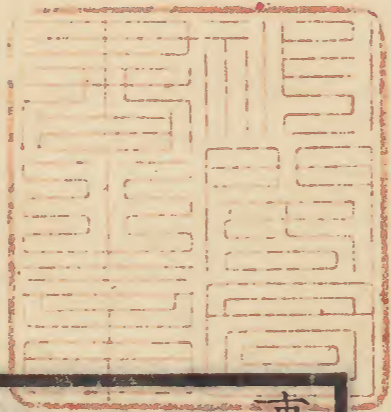
第七

新刊本

內閣文庫	
番號	和 34053
冊數	40 (9)
函號	171 45

共四十





重修真書太閤記八編卷之廿五

宇野忠左衛門尉山路將監を偽欺事

并山路將監慾心增長の事

去程小宇野忠左衛門尉ハ柴田勝家が為りとして
佐久間玄蕃兄が説小役ハ只一人夜ハ紛れ堂木山
の陣中へ忍び入何処ハ山路ハ役所あるとぬき足
さし足して尋ね求めややく小ハ山路ハ陣所
小至り柵門を叩くと音信ハ如法深夜のとき
云ハ用心厳しけれハ山路ハ家人早速ハ聞舟あ
りのおるぞと咎められハ忠左衛門聲を低くし

や苦しかりざるのぞ將監殿小宇野忠左衛門が
 参りてゆとやべいと云ひ入るゆ此程まで申越
 前小てハ朝夕出入りして睦まかり忠左衛門
 がとあり下部まぐも面を知る敵とあり味方と分
 れても何か隔つべきと將監小かくと告れば將監
 由日頃あつかうさ宇野が来りいとさ、飛とつ月
 ぞ小思へども今ハ互小者のごを削る中あり人の
 心申知ずたすく面會その憚まよゆら断い
 ぬて返すべしと思ひ定め我家人ゆ口上をり含め
 柵の内より忠左衛門殿ゆ能ぞ入来りりるれ
 御心ざりのほど過分ゆさりるがう何の用あは

御入ゆや殊小夜陰と云ひ面談ハ人の批判ゆべ
 一因て御あつかうさハヤをかりあくり共是へ
 とも申さば誠心の外ある世のありゆささ御
 思ひ合せあへかへかへすくも御入のほどかへ
 けあくり御用のかとも承知仕とくと云をせ
 加ハ忠左衛門あへかへ世のつしほりさハ是方
 申同しとゆゆそれをバ思ひゆハず夜陰小参りゆ
 とハ幼稚の昔ハいふ及はず壮年のこの頃まで
 由朝晩小親しみ寄りゆと忘れ不や定めく御忘れ
 由何るあし然る小計らず此の如き世ゆありては
 へハ今日も明日も戦場の土とあるべき身ゆ然

大隈証八編卷廿五

二

バ快く一面をとげ一盃の酒小長夜の闇を晴けと
 く存ぞんゆふより此このどく一瓢ひょうを携たづへて参まゐりゆ我われ等
 二人ふたりいと同郷どうきょうゆ生うれ然しかも同年どうねんゆ仇あといひ讎うらみ
 と呼よぶべきとハ覚おぼえりさぐとせしを取次とりつぎの者
 ちりのあゆみ将監しょうざんゆ何なにありゆあつかりくて
 りのごろ小聲こゑをかりゆ聞きむやと思おもひ忍しのびて柵さくの
 かとせりゆ立つれハ忠左衛門ちゆうざゑもんノ口状くちがたかちゆあく
 さひく何様なさまと思おもひ返かへり自ら柵門さくもんをひりさ宇野殿うのどの
 ゆて御入おんいりゆ御渡おんわたりのよ承うけり及および何なにとあく昔
 の忍しのむれせめて御聲おんこゑをかりゆてゆ聞きむやと存ぞんじ
 是これまで立た出てゆ御心おんこゝろゆ我心わがこゝろゆ同おなじとゆ是これへ

御入おんいりゆ一敵ひとたけとゆ味方あじかたとゆヤさぐ越前えちぜんの家いへゆ何なにり
 一ひと心こゝろゆ一時ひととき御おんのかを承うけりゆべくゆとて
 手てをとれバ忠左衛門ちゆうざゑもんゆ将監しょうざんどのゆて御おん己おのれとゆりゆ
 りいざりバとく帯剣おびけんを取とりて将監しょうざんが家人かじんゆ己おのれた
 一ひと小座敷こざしきのゆちへ通とほりて見みるゆ左右さうぶ近習きんじゆゆ遠とほざ
 け只ただ二人ふたりとゆ向むかひとゆヤ何なにりゆ将監しょうざんゆはる川
 さてゆ貴殿きでんと某同年もくどうねんと云いひ同郷どうきょうゆ生うれ竹馬ちくばの昔むかし
 より朝あふ夕ゆふゆあれあトみ兄弟けいだいゆゆ勝かりとる心こゝろ中
 ハいたぐも互たがひゆ知しれとるゆあがり某伊賀守もくいがのりゆ舟
 られつれバ心こゝろゆあらん長濱ながはまへうつり住すまところ伊
 賀守がのり筑前守ちくぜんのりゆ一味同心いまいどうしんとゆゆより我われ々々までゆ筑

前守の方人となり此城中に在ると誠の本意あり
 ずよつて越前のを忍むべくかつ匠作の思を忘れ
 ずいへ共今ハかくくハバ思ひわたり為べき
 方便申あく一日く過しハ今宵ハをかりず
 御入ふて日ごろの思ひを晴しハ明日討死致しハ
 と申心の残りなく御持せの飄御開さいへ着を求
 め出しハべいと云ひて實ハ餘念をなれハ忠左衛
 門申さてハ將監いよご越前のを忘れずなり然
 れハこれハ心を動かさんと難かりと申へハ早
 説ふとる心地せられよハかの歌より出しこの
 酒こそこの勝家の賜なりと云ふれと云て

さし置バ將監手小とりくをわしとださ宇野
 殿の御深志小ありをわらば主君の賜をり酒を
 為とりいでを肴と云ひつ取出すを見れハ
 麴の大きさ一尺小ありるありそれより瓢の酒
 の盡る小及び忠左衛門申如何ハ將監どの
 竹馬の好を思へハ敵申味方申ち已すれたるの
 みるりず忠申義申いふ及及又一瓢の酒小一
 座の酔を催してこ一方行末を思ひやくらた山
 路どのまよ小匠作の思をかりひあふりハ何と
 て筑前守ハ役ひあふぞ匠作ハ伊賀守小こそ付
 させめひつらめ筑前守小役ひあくとハいそれ

りつらんといへば將監いや伊賀守の従ふ身あり
 伊賀守筑前守の一味はハのかぐ否といを
 るべきやと云ふ忠左衛門さひやそれこそ山路殿
 の心の是らざるところあり伊賀守が筑前守の従
 へと云ひつる時何とく匠作へ御をとりハ仰せら
 れすいやそれ御覽へ貴殿の行状是らざるところ
 りとやべいと云へば將監さつあり何れ由宇野
 殿のいをも、首道理の叶ひくハ始ハ匠作へ
 て見むやと存分へ共大鐘藤八神谷越中始り
 いづれも筑前守へ無二の志を運び今度越前を打
 回ろゆいひあバ匠作の知行を配分せん時丸岡

を充行ふべき由筑前守にていより今の世の侍
 ハ渡りりのあり一城の主とあり多くの所領を得
 んと又五十年の樂みと思ひ分て一味せしありと
 いふ忠左衛門や丸岡の城御所望むありやく
 年来の主君ハ向ひ弓矢をとりあふとや去からハ
 丸岡の城ハ忠義をあへく末代ハ不義不忠の名を
 流しあふとやべいとほどほり丸岡の城ハいづ
 忠義と云をれく由御手ハ入可なりのを浅あ
 何さあいと云ひく咲ハ將監聲をひそめ何と云ハ
 るいや忠義といをれて丸岡の城主ハあるべき方
 便なりとハい加あるとやと問そのと宇野膝

すりよせ眞實しんじつ丸岡まるおかの城主じゆうしゆありあそぐ越前えちぜんへ
 御歸ごきりりつべさやと詞ことばを推おしバ將監しやうかん眞實しんじつ越前えちぜんの思おも
 を忘却わすれせぬい今いま小こちりれ越前えちぜんへて歸かへれと云いもれ
 小こちん小こち争いで違背いざな中ちゆうべさまゝて丸岡まるおか城主じゆうしゆ小こと
 阿あらん小こハ此こゝ岩いわを燒や立たて返かへり忠仕ちゆうしやうりいひあんも
 のも云いを聞きて宇野うのがいふや其御詞そのごことば小こ相違さういあ
 くハ竹馬ちくばの好よみあり不忠ふちゆう不義ふぎと云いもる友ともき忠ちゆう
 義ぎの侍さむらい小こあゝあゝと云いバ將監しやうかん忠左衛門ちゆうざゑもん
 を伏ふしおかみ同郷どうきやう同年どうねんの懇志こんしとハ云いひあそぐ左さ
 ほど深切しんせき小こ思おもひあふ友垣ともがきも又また稀まれあるべし願ねがはく
 ハ某それをすくひあひ匠作しやうさくの御前ごぜん志しあるべくとり持も

あふ丸岡まるおかの城主じゆうしゆありあそぐそれ程ほど小こあく
 とも匠作しやうさくのとハ忘わすれりさぐ能よ々々肝煎きんせんあへと云いひ
 なる小こより忠左ちゆうざエ門もん立歸たてかへり玄蕃げんぱん小こかくと云いへバ
 玄蕃げんぱん大おほ小こよろこび直ただ小こ匠作しやうさく小こ告つて伊賀守いげのうぢが領りやうせ
 一ひと丸岡まるおか八万石はちまんごう小こ大野おほの郡ぐん四万石よんまんごう合あせ十二万石じふにまんごうの
 目録めいらくを書かき朱印しゆいんを押おし忠左衛門ちゆうざゑもん小こ渡わたりれば
 忠左ちゆうざエ門もんこれを懐かこみて再度また將監しやうかんが陣ぢん処ところ小こ至いたり
 將監しやうかん小こ面會めんかい一ひと昨夜さくや云いれ趣おもを匠作しやうさく小こ語かたていへバ
 匠作しやうさく由よし貴殿きでんをハ能よ々々惜思おぼれいと見え大おほ小こ悦よろこむれ
 眞實しんじつ小こ味方ちかへ返かへり思おもはさされいハ丸岡まるおか八万石はちまんごう
 小こ大野おほのの郡ぐん四万石よんまんごうを加かへく充行みちゆむるべく由よしりさ

れ朱印を出しあふふより集うけさり参りてい是
 御覽へへとて目錄を出し見せしハ將監も心中
 小肝を消し我筑前守小従て本意の如く柴田を滅
 ぼしとりとも約束の丸岡八万石を大鐘神谷三人
 と分て領するあれハ一人三万石小足らぐ返り忠
 し直小十二万石を得んとハ實小雲泥万里と云
 べしと決著し忠左エ門小よくく口固り返忠の
 方便を相談して宇野を返しける小より宇野ハ又
 この砦の案内をくく見分しくぞとちかへり
 ける

山路將監今井野村を試る事

并今井野村使節の事

宇野忠左衛門尉を柵門より送り出してのち山路
 將監つくく思ふやう不思議ある友達の懇志をか
 又有がとさ故主の思義々我長濱へ来りしと由
 北庄小てハ多分の侍のとり俄小出身せんこと
 まと小難し伊賀守方小てハ寄騎あり何ぞ小有り
 ても早く役舟べしと我身出頭のとめありさ然る
 を故主の厚き思名といひ丸岡の城主小あされ十
 二万石の所領を与へんと朱印を出されしこと
 夢小夢みし心地ハせらるれどさら小也免小ハ何
 らざりさ左四ど小我が身を頼りかりあふ主人

への土産かつハ傍輩どりの思ふところ第一小忠
左衛門へ對して申徒手小てハ如何あり然バ木村
小隼人蜂須賀彦右衛門父子を討とりその首を持
て土産とせむやと思ひ付一かど申三人と申武勇
といひ智謀と云ひ容易ハ事を遂かといか小
せありと思案一はるが越前より連れさとり侍
ど申の内小ハ彼と思ふりの申あり長濱小て抱と
り一新參の侍小今井角右衛門野村市内と云りの
けり兩人と申力けくまでつよく劍術のむや己ざ
十廿人小申勝れさるりのあれバこの二人と自分
と三人一々木村蜂須賀父子を討んことハこゝろ

申一と思ひさどめさて兩人をよび寄せさよん
のりの語り小時をうつ一茶を飲ませ菓子を手へ
その一ち將監申るハ我今度一大事を思ひとち
とりそれ小舟その方二人ハ新參あれど申器量と
いひ心中といひ世小とのり一思ふ小より今夜
こ一へ召出とり何ど小申れ某ガヤ談ずると
違背すまよきや如何と云ひ申れバ今井野村顔見
のむせ今井ハ如何某小於てハ御請申と野村ガ云
バ野村ハ如何某小於てハ何とて二心けるべきと
今井ガ云を將監さ申嬉一にる顔色一々左いふ
かり小ハ疑ふべき小けらぬど申誓紙をかきべ

とて牛王を出し前書ハかろくと書記一二人が前
小さく置ハ二人とも讀て見て主人の仰をそむく
りの天地の間小有べかりずいごと云より早く
野村と今井小刀を取て小指を突き切り名判の上
小血をそいごてぞ出しけり將監これを一覽し此
上ハ何れ心を置べき其方共も知るごとく我ハ元來
柴田の侍あり伊賀守の寄騎としてこの長濱小
れども心ハ北庄を慕ふりのから匠作もよと某を
思ひ忘れぬに因て今度某を召返さるるなりその
召返さるゝ小ハ今まで伊賀守の所領とす丸岡
八万石小大野郡の内四万石加増せられ十二万石

を充行ふとの朱印を出されたり然バ其方どもを
も五千石以上の身とありつかを及べよるこび
ゆへと云バ兩人共殿ハ大身小ありありぬ迄
も五千石以上とすハ盲龜の浮木優曇華の花よ
りも得がとさ大幸福ゆたをそれほご小匠作
の思召さん処へ殿小も徒手ふて如何往とあふ
べき御土産小ハ何を手持てあふやらんと云ふよ
り將監いかよそのとあり自分小もいろく考へ
つれども木村と蜂須賀父子の首小あけりのあり
ドこの三人を討べく思ひ立ちつれども某一人小
て三人を討とんと容易かりその方二人と蜂

須賀父子あり共木村ありとも其場の便宜次第仕
るべしこのとき戸解んとり誓紙をも望みあり
といへば兩人共心中ハ深く驚くといへども更
小これをも色小出さばこの兩人ハ羽柴筑前守の侍
ありはるが伊賀守の筑前守ハ一味とさより
山路ガ心を氣づかふて浪人分小とりあへ長濱へ
来りて奉公をのぞみし山路その武藝をよろこ
び抱へはるあり元より山路を窺むん為小入こみ
しりのへかく浅く一紙の誓紙ハ心をとり
うちつけはるこそをかあられ今井野村ハ將監ガ
傍へすりより心得てハ御氣申しく思ひ召すべし

何時小ても殿のちそをいし時御先小仕るべくハ
あかきあがり兩人を如何しき一時小御討あさる
べく思召やと問ハ將監よくこそ心付とれ是ハ
明後朝三人を招き數寄屋をかこひ茶を飲すべし
そのとさ小三人を一時小討果さんと思ふありと
云小より野村今井の兩人ハ詞をそろへ何さまよ
りし御計略小れもや御三人の許へ御申入り
しあやと問ふ將監いやとよ討手を定りしちと
思ひいまだ申入らずと答へられハ野村今井の兩人
さらバその御申入の御使より我々兩人勤め申べ
くいと云を聞て將監加ざりあくありこびさらハ

その方兩人にて合て相勤むべく口状ハ當表
御出張すで小數日小及び定めて御徒然小渡ら
せぬふべし此方とくも同様の御下小勝家も出
陣いとゆる承りゆへども切加ふる氣色も
見えぬ筑前殿御隙明次第御歸陣を待らと存
どころ是よといつごころ小あり可や我御さ、及び
ゆやらん然バ合戦の期いつとも存トられず
去らがり双方共小矢合とののちハ少く暇
あぐく此間のうち小參會いとい快よく鬱散致
しとく幸ひ湖中の鯉あらび小競の類多く到末
その上小若狭小鯛あ見えゆ間御三人請一献

を催やとくゆ加あらず御同心ゆさうふとくれぐ
やつけゆとせとや含められハ兩人とも一義小
も及むぐ承知し今井ハ蜂須賀彦右衛門の陣へ野
村ハ木村小隼人へ参るべくゆと定めて其座を互
小別れとあり
南麓本小本山の要害小心を變ずるりのり由
誰共あり小云出し加ハ米村小隼人佐を本丸へ
入大鐘藤八郎木下半右衛門山路將監を外曲輪
へ出し用心さびく見えし処ハ山路卯月十三
日の朝小隼人佐へ茶をよさんと約し用意志さ
りあり此企ハ木村を討て柴田ガ勢を本山へ引

入んとの隠謀とかや然るをその夜の子刺を
 かり小木村が門を叩くりのり誰と番のりの共
 問ひられバ殺陣より急用のとみく有ぞまづ門
 を開きゆへといひひま、轉人ぬその旨告一丸
 小大崎字右衛門尉さ、ゆへと有一々バ則出向
 ひ何用の御とぞ承むりのべと云いとさいや
 御本陣ありの御用ハあらぐ伊賀守の具臣
 野村勝次郎これまで参りとる由ゆへと有ハ
 より大崎立かへり其由ゆへに去ハ内へ入よ
 とて近習十人むかり野村が左右ハ從ハ屋裏へ
 入一々バ野村刀脇指を大崎ハ渡一ひそかゆ

上ハおんと申をり立より私語はるハ山路將監
 心變ドてハ明朝御茶を中數寄屋ハて御邊を討
 奉り本山城へ柴田ハ勢を引入んとのとハ相極
 ありたる由云ひられハ木村ハぬさ申有らんと
 覚えとりさらハ只今逆寄ハよせ打果すべいと
 有ハを野村承をり先蒙氣のよハ仰つかをされ
 相延され明朝御仕加けハハ同類残らぐうち
 果されぬもんやと指番せハハ尤ありとて山
 路方へ俄ハ虫さハ出痛みハ間明朝ハ参るお
 さ旨使者をつかちハハれバさてハ此ハ推量有
 あり反り忠を心元あく思ハ密談の者ども誰

かれと呼ぶ野村勝次郎を居ざりける反忠此奴
 むんやり時刻移りあはりありあんと長濱の
 宿所ふ母や妻子とも有しを巴山路が甥と旧臣
 二人つ加えし船中て早く退けへ財宝等少少
 相かよむ片時も早くのさけへと早く出しその
 身ハ密談の同類三人同道し難のこゑをいめて
 そこをありあり落おりりと足ゆ
 又一根今井角右衛門尉本名ハ稲田四郎左衛
 門とて濃州郡上の稲田丸バ稲田九郎兵衛と
 同姓しとり野村市内とりハ林与左衛門が
 としとかや後小三好孫七郎お仕へそのうち朝

鯨へ渡海し軍功ありしと堀内安房守の書翰
 小見の林六郎光明の後ありとりりあぬくハ
 志ととハ次々おみえたり

重修真書太閤記八編卷之廿五終

大岡政談 編卷七十五

三

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

重修真書太問記八編卷之廿六

今井角右衛門内通の事

并山路將監北越陣へ退去の事

山路將監正國をどりめハ大谷慶松の游説小迷ひ羽
柴筑前守ハ一味ハ後ハ宇野忠左衛門ガ舩舌小
欺れ且丸岡十二万石の富を利として木村蜂須賀
を討んとを謀るよと小仁義禮智ハよると能ハズ
只利のこ是争ふ戦國の風と云ハあぐり又勇士の
恥るところあり宜ある加あ忽ハ其母と妻子を殺
害せらるゝと又自身手を下せると同トと云べ

角右衛門其座ハ立セドと切て加、る角右衛門飛
 退きこれハく、蜂須賀殿左サ、御せさ成され
 けハ如何ある御心入、や某將監、近きころ抱へ
 られ、美濃侍、御見知、有べく、併、れ、使
 者、小就て入用、あ、た、へ、バ書状、を以て、入、れ、を
 人、時、小此料紙、ハ何處、の所産、と御不審、有るべ、さ、や
 能、御心を静、め、られ、將監、ガ、入、口、状、の御返、事、
 を承、り、度、と、セ、バ、彦右衛門、又、て、も、左、サ、
 の、を、や、返、事、ハ、此、方、の、胸、お、り、其、方、の、差、番、
 及、バ、と、云、角右衛門、その、御胸、お、包、み、め、御返、事、
 さ、う、け、め、り、罷、り、歸、て、將監、お、さ、ず、ハ、使者、の、役、

立、り、あ、く、これ、式、の、知、食、め、さ、れ、蜂須賀、ど、の
 小、ハ、お、ま、ま、さ、れ、け、左、サ、り、仰、せ、られ
 け、と、ハ、世、お、も、不、思議、の、奉、存、と、り、れ、バ、彦右衛門
 この、方、お、く、も、軍、ハ、あ、り、日、々、退、屈、いた、り、但、彦右
 衛門、な、ど、ハ、長濱、と、り、久、く、住、と、れ、バ、懇、意、知
 音、も、多、く、殊、お、都、お、り、傍、輩、も、さ、り、然、る、お、何、方
 より、も、小、勤、一、つ、贈、り、の、も、あ、く、都、の、傍、輩、より、も
 陣、中、へ、見、舞、ハ、無、用、と、の、定、め、お、り、誰、あり、も、中、越
 と、あ、く、樽、あ、ど、贈、り、と、絶、て、これ、お、不、定、め、あり、然、る
 小、將監、長濱、お、住、と、久、く、り、り、ぬ、お、湖、中、の、鮮、魚、數、頭
 を、得、し、と、云、と、尤、以、て、不、審、あり、且、か、くの、如、く、処、々

小陣を張ハ湖中の獵ハ別々幸有るべかりす幸
あさ小馴赤由薄き山路の魚を贈りーと云と更ハ
其心を得ず若州より便宜と云由疑もーさとし
若狭国より此国へ入りのハ高島郡小入谷天増川
森西白谷四道の外りるべかりすこれハつづれハ
丹羽五郎左衛門の領知ありて海津塩津を徑ずハ
爰許へ便宜の道りるとあり海津塩津ハ関を居
たり此若へ入らんりの我耳ハ入ずーくいりて往
来すべりんや然らバ若狭より小鯛得トハ論ハ
及も偽ありそれ彼合せー思ふとさハ其方の云
ところ一ツさして實ありけすべー虚言とさこハ

田へハ譜第々新抱へーととづれあり譜第あり
ハ將監と腹を合せー某父子を欺りハ来りーハ
るべー新参ありハ土地の案内知りぬ故實ハ將監
ゆだよされーありいさーくハ蜂須賀彦右衛門尉
あり山路如さか方便ハありるべさや知とさる由
有るありハ正直ハヤセその様ハありて命を取
て返ーハせん愚ハハ虎の鬚をあて龍の領ハ王を
現ふくせりのハあと云をれー角石ハ門仰天ハ堂
木山の大將目とりて御明察の段恐入ハ某こと
よとハ山路ハ譜第の侍ハハハず新参ハ何ト
由弁ハヤさハ加うくせよとハ解られーハハをヤ

述ていれ左サリある子細りりと存りさばい愚さ
よとす彦右衛門といく如何れ角右衛門將監
が我等父子木村よでも呼とハ酒りりせんといひ
立て三人あがり討てとらんず計策ありめそれを
知つ、使れ立しその方より何とてそのお返す
べさやと又立かゝるを角右衛門申れよちあへ蜂
須賀どの其本性ハ濃州侍めて山路の家へ新参せ
ハ筑前守殿の内意よよりてあり其をうちころ
しめひあハ筑前守どの、御意ハ叛きあふべしと
つふをささ、蜂須賀又十郎おどりぬり推参り
今井角右衛門かのれ山路侍と名のり其父子を

何ぞか加んとり此陣中へ入来り我父ハ山路奸
計を見りたりとされそれより種々と云ひまゝ終
小至りて筑前守の内命をうけりまど云ふとて由
誰ハこれに眞實とせん尋常ハ覚悟して首を授
よと同日く切られハ角右衛門今ハ詮方あく左
云ハるハ道理至極志ありバうちりサベト是
御覽ゆへと懐中より取出しとる筑前守殿の墨附
是れと云へハ蜂須賀父子由猶豫去あがり取上て
これをひらくハ判形ハ正しく筑前守の自筆ハ相
違なく手跡ハいつの石筆あり彦右衛門熟々と
よみ終りさてゆく今ハ始りぬとあがり筑前守殿

の思慮深く山路が心底を疑がひぬ今井を入り
 こよせ置くれこの抜目あさ怖ろしくかくる
 我等が上にお定めて隠し目舟の何ふあらんと彦
 右衛門父子互にお目と目を見合せ抜とる刀を室小
 納め今井角右衛門使者の趣心得るゆりや鶏明
 近づさぬ御茶の刻限相違なく父子相揃ふて参る
 べし其時御礼ハヤすべしと云ハ角右衛門さし心
 え何ありお使者のぬへり選あそりさり氣をやさ
 将監りし逃りやせん直おうち立御出られと云ハ
 ぬことバお心をこめ今井ハ眼をつけくさり帰る
 木村お使せし野村市内ハぬひく木村と知るより

ければ直お山路が謀計を告はるゆあり小車人用
 意をど、のへ蜂須賀父子を同道せんと彦右衛門
 が陣所お来りし加ハ彦右衛門今井が始末を語り
 出し茶室お入バ免やせん角すべしと三人意と意
 お示し合せ山路が陣所へ趣さぬ山路將監ハ使者
 の歸りの遅さを怪しむ誓紙ハせし二人と由新
 参あり若や木村蜂須賀お疑むぬ大事を明せし
 さも何りあバ此身の難儀如何ハせんと立つ居つ
 案じ暮しゆるが急度思ひ舟我甥ありゆる山路を
 八郎を呼びよせ火急の大事りり長濱おせせ向ひ
 我母我妻引き具し船おのり塩津海津のかとへ早

々立ち退きしに財宝少し目をかくべからず急
げやくと下知し出るとその後には陣屋小火を
あけ焼立火事よくと呼ぶるくその終れ小中尾山
の柴田が陣屋を志ざり取りの由とり向へて
のさしり木村蜂須賀ハ火の手おどろき馳せ舟
けみれば山路ハ逐電行衛知れず早々うち寄り火
を消し事の本末筑前守の許へ注進す
筑前守山路が一類罪科の事

并山路佐久間軍談の事

此時筑前守秀吉ハ濃州大垣の有りて岐阜の城を
加こみ晝夜を分とび鉄砲を放ち矢を射くけ一時

責め攻落すべしと短兵急せり舟あひにる処へ
木村小舟人蜂須賀彦右衛門尉のりこより早馬を
よひりせしりバ筑前守その使をみるより山路將
監何と一つふ定めて砦を立のさしりまらぬと云れ
加ハ木村蜂須賀の使大おどろき何とて殿
おハ知らせぬひしりまらぬと云るより筑前守
それ様のと知ずして多くの軍勢を引率し鷲鷹の
如き諸大将を使ふとあるべきやと云て大お笑ハ
れ加ハ木村蜂須賀の使者かここあり山路將監
使者を以て木村蜂須賀を朝茶おあひさしり外其
使の口扶小不審のそこれ有りけり彦右衛門是

を詰問仕りけへハ殿の舟おさめひーののるを
りつゝ大かこ將監ガ謀叛の氣色も知れ間木村と
中合せ逆寄ゆよせゆところをや將監ゆ陣屋ハ火
をかけ焼立ゆその紛れハ立退てハ手延ハ仕り
取ゆがハ我々ガ油どんかこまり入りゆと
トはれハ筑前守山路ゆどのりのハ目をかけず人
並々ハ思ひハ去とハ盲人同様の大將とゆかあ
このハ心をおけけへ但ハ將監ガ母や妻ハ長濱
ハ阿るべーこれハ今日ど立のさつらんあれども
追かけおハ追止んとかこかうハ藤堂源助をや参
れと下知せられハ加ハ源助かこまり數十人の

兵士足輕を引率ハ飛ガ如く走行源助この時廿八
歳壯年おがり武勇と云ハ又早足ありハ加ハその
手のりのさゆすぐりハすぐりて名連れハハ大
垣あり長濱まで十三里を三時をかりハかけつけ
とハ長濱ゆてハ山路多ハ郎筑前守あり必定追手
をかくふあらんそハ先ハ當所を立ちのさ一
先塩津海津ハ船を舟け若州へ落ち行こをれゆり
本國へ歸り入りんと將監ハ母ハ妻子を船ふと
りのセ漕ぎ出すすぐハその船十餘町を過さる
こハ藤堂源助長濱ハ至り山路ハ宿所をとりまこ
て穿議するハをや落とると見ハとざせど関

の木あく玄関書院の障子の梅りまはれハ立入り
みれど人ハあゝ遅かり悔しきよ然れど由いよ
だ遠くハ行ど加をりぬ湖上を船めてをせぬらん
の共参れと聲かけて濱邊ハ至り早船一艘尋
出しこれハ打のりかゝ出し浪間の鰭をををやめ
はる山路ハ船ハ十餘町のびどりけさか比良の嵐
小浪さく立石さへ中先ハ中すくまバこそゆり何
げゆり下し一つところハ票よひはれハ足弱ども
ハ肝魂も身ハをもむ今中や湖中ハ身を沈むらん
と船底ハ倒れ伏し泣かぬハ有さよ目も何くら
れぬ次第ありかゝるところハ藤堂源助船こぎよ

大陽言ノ多ク七ノ

せ見れば怪しき蓬屋のうちりや夫と乗移つ
そ山路多ハ郎のがれぬ処と手早ハ半弓引し
切て放すを源助高虎心えとりと身をひりけハ其
矢ハそれて湖上ハ落つ南無三寶阿まてりと多
ハ郎二の矢を打番ハ引さ老母の処を源助高虎や
つと声かけ抜うち切てかゝる電光石火すさ由
何れせぬ山路ハ有先より腰の下まで真二つハ切
りりれ片身ハ船片身ハ湖中へ沈みり蓬屋ハ入
て泣沈む山路ハ母と妻とありめ取り直ハ濃州へ
引さかへし筑前守ハ此由を告げれハ山路將監と
しり柴田ハ背きて我手ハ從かひとさハ謀叛し

大陽言ノ多ク七ノ

九

て伊賀守あらび小我等小をむく如是人非人の見
懲めせよとてふと一び長濱ゆつれ行さそれより
木本をこころ柳が瀬ゆいり柴田が陣へ程近と
こころあく老母をそめ妻子すべし七人山路將
監正國ハ四月十三日の夜謀計のかあをさるを
知て速う小我が陣処へ火をあげ火事よくとさハご
立そのよごれ小佐久間玄蕃が陣取一行市山へに
げ入とり玄蕃これを見ていかやいりに山路將
監何とく只せさふせさく駈来うぞ陣処ハ火事何
り何ぞぞと問われく正國大息つと木村蜂須賀を
うち取て當手へ歸參の土産ふせをやと謀りて

大目言ノ終卷ノ下

の調をぐその使小立一新參者ガ返り忠せーと思
たる一ゆより止とを得ず當陣へをりこみーと
語れハ玄蕃も氣のさく顔小くそれハ近ごろ残念
至極去あがり御邊の無事あく来られハ味方小
取て大ひある幸福あり木村蜂須賀が首を得さる
ハ本意あるれと敵地の案内知とる御邊これより
味方の軍議小加をりて百戦百勝の奇計を施こ
めへと慰められ將監もすこし落つと長濱小残
置つる老母や妻子の身の止を如何ありさ案
ト居とり小程近とさう小おなく入の集り来
つ何どをあすやと見れハこれを如何小將監が母と

大目言ノ終卷ノ下

料

妻子を磔はりつけのあけて棄去すてたり正國ただくにこれを見て身を
 何せりいど困こまめどせん方かたかく其そのあくそこ小間こま
 絶たしてそ伏ふとりり佐久間さくまが手の者もの一同いっどうい
 さよ將監しょうかん心短こころみかく欲深ほくされが母ははや妻子つまこを見ご
 ろい小殺こころつるぞや人ひとあをりりどと丸つぶをどきま
 てこれこれを笑わらふ
 浦菴うらむら本もと小將監しょうかんが陣じん外ぐわいひもくとさそき出いとる由よし
 野村のむら勝次郎かつじらうが宿所しゆくじよより告知こぞりせれる間ま則すなはちかく
 と年人としのひと佐さふりこれこれハ退のきささるりのゆこそ
 とくくくくと引卷ひきまき一尋ひとぬれハ案あの如ごとく思おもえざ
 りりり長濱ながはまのちる母ははるくありゆ馬うま上の五六ご騎き

つかき見れハ早船はやぶねめき忍しのびたりとあん番船ばんぶね
 の者ものも熟睡じゆくすいして何なにりし山路やまぢ將監しょうかんが母ははの乗のりと
 る船ぶねの艣か番船ばんぶねの破やぶの細こわらりかハ十艘じゆぶねの
 番船ばんぶね一度いちど小こられ出いこれハ如何いかある船ぶねが通とう
 ゆこそとて聲こゑ々々小こ言ことり出いこれハ案あの如ごとく知しり
 ざる船ぶね見みえつるゆよつて追おかけ船ぶねを止と見みれハ
 山路やまぢが母はは妻子つまこどりありかれこれ七人しちにん番船ばんぶねへ取と
 入れ漕こ舟ふねり年人としのひと佐使者さしやとゆ小渡こわた侍ざむらいりり山やま
 路ぢが母はは妻子つまこ共とも七人しちにん秀言ひでことへ上奉かみまうり謀か反はんの様よう子すけ委い
 老おく木村きむらや上のかハ卯月うづき十六日じゅうろくにち柴田しばた陣ぢん取とちう
 う逆さかむつつけゆかけく山路やまぢこれを見みよくと

高聲たかこゑ呼よを川がとどつと鯨波くじなみをりりどよめき小
 けりと見みゆ
 佐久間さくま玄蕃げんぱんハそれを見みく山路やまぢうガ心中こころぢうを察さつしとぞ
 かし正國まさくに憤怒ふんぬハ堪たへざるべし一方いっぽう便べんを得えたりと悦よろこび早はや
 りつて敵陣てきぢんを破やぶるべし一方いっぽう便べんを得えたりと悦よろこび早はや
 早將監はやしやうかんを呼よび寄よせ只今ただいま見みゆひしありん筑前守ちくぜんしゆハ
 御邊ごへんのとめハ老母らうぼの警おしありはやく討うちとり孝養かうやうハ
 備そなへぬ某後まがうらをくろめしべしあり餘所よその見みる目め
 どの口惜くちあはしと何なにと云いはん様やうあり何なにの砦とりでを攻せめ
 ころりハ早はやく攻せめばと云いひしハ將監しやうかんハ落おつ
 涙なみだハ袖そでをひきしあがり御察ごさつの如ごとく正國まさくにガ勝かち

断ことわり仕つかりあり筑前守ちくぜんしゆガ若わかどりの容ゆる子こハ軍勢ぐんせいの多少たうしやう
 兵糧へいりやうの増減さうげんまで大方おほまハ存ぞんじくゆハ賤しんガ獄ごハ中ちゆうハ
 及およばず堂木山どうぎさんその母はは加かすべて要害やうがいよろしく万事ばんじ
 の手配てはいり行いき届とどまてゆへハ勿なくハ攻せめ攻せめるとも
 一朝いちぢやう一夕いちせきハ攻せ破やぶりたゞくゆへハ其上そのうへハ砦とりでより砦とりで
 を相互あひあひハ救すひゆし組合くみあせとゆ其備そのそな立たまよハ嚴げん
 重ちゆうハして急いそぐハ落おちさるハ其備そのそな立たまよハ嚴げん
 了りやう簡かんハくいづれハ十日じふにち廿日にじふにちをかかずハ攻せ落おつ
 がとと存ぞんじハ但ただハ大岩山おほいわの砦とりで一ヶ所いっか所これハ要やう
 害がいハ浅間せんまあるとハ俄はなハととるハ未いま
 ど堀ほりの土つちハかたさきハ普請ふしん向むかすべくハ鹿相しかあひハ

河ひどこれに攻めゆも容易く攻落し申べくと
存じゆと申られぬ佐久間玄蕃盛政大に感心し何
さま敵陣の虚實左申りぬくを〜知れりう〜と
猶豫すべし小石ら即時に出これにぞぶるべ
くい筑前守方の若一ツ攻取りゆハバ残りハ自然
と破竹の勢にて落し可なり將監御邊ハ荒手
り案内者あり先陣〜あり〜後陣ハ詰あふ
と云へハ將監佐久間向ひ先陣ハ元あり其好
むところ争で後陣下るべし併るなり大岩山の
若きハ中川瀬兵衛清秀とて五畿内ハ名高き侍り
守りてゆと申りぬと申りて仕損ぬあよと云

バ玄蕃ハうちりひ中川とて鬼神ハあらぐ三
面六臂と聞ゆかよむ将監見ゆ盛政只一擧ハ
うちかど〜其瀬兵衛と申りの首を取て見すべし
ぞと勇みぬいさんで山路を伴ふハ勝家の本陣へ
行向ひ歸参のよ〜を披露し〜ハ勝家も大ハハ
將監ガ志を感じ軍評定の列ふさ〜加てり

重修真書太閤記八編卷二十六終

太閤記八編卷二十六

三

大隅記八編卷廿七
佐久間玄蕃元盛政中入の謀を議する事
并勝家盛政の血氣の勇を留る事
然程佐久間玄蕃元盛政ハ山路將監正國ハ味方
ハ歸參者つるハあり賤ガ獄あり一々堂木山岩崎
山大岩山寺の要害の善悪人數の多少兵糧玉藥の
數まで委細ハ知はるハあり盛政中入の謀を思ハ
舟山路將監を修理進勝家の陣処ハ同道ハ勝家の
前ハ於て羽柴方の備立手配りの事ハを語りセ其
語ハ就て中入ハ一時ハ數箇の砦をうち落さんと

重修真書太閤記八編卷之廿七

佐久間玄蕃元盛政中入の謀を議する事

并勝家盛政の血氣の勇を留る事

然程佐久間玄蕃元盛政ハ山路將監正國ハ味方
ハ歸參者つるハあり賤ガ獄あり一々堂木山岩崎
山大岩山寺の要害の善悪人數の多少兵糧玉藥の
數まで委細ハ知はるハあり盛政中入の謀を思ハ
舟山路將監を修理進勝家の陣処ハ同道ハ勝家の
前ハ於て羽柴方の備立手配りの事ハを語りセ其
語ハ就て中入ハ一時ハ數箇の砦をうち落さんと

を勝家の勸めりかど由勝家たすらくこれに承引
てん盛政年若さかゆえ血氣のたすると云ど由
軍ハ左サリハ軽々たすべさりのハ非ずと云
を聞て盛政いとけ高ゆありて大音聲ゆりけるハ
あどや匠作ゆハ左程ハ猿面の藤吉郎ゆを奥深く
思ハ名すゆや今夜深更て行市山の峯を傳ハ賤
嶽の麓ハ下り立ち餘湖の渚を大岩山へ押寄せ
無二無三ハ攻立ゆハハ勝利を得んを眼前ゆの時
刻移りてその詮ハ早々思ハ立ゆやと勸めけ
るゆより勝家ハ此謀よとゆより勝家若き時あり
ハ必定勝んと思へどゆ今ハ老より危ふと軍ハ好

あからず殊ハ中入の戦ハ加サリハの場所ハ
あぶあしと云れハ盛政大ハ氣色を損トハ
ヤ左ハわりりハ加様ハ長々と對陣ハ日を送る
ちハ岐阜ハ落城ハ蟹江の瀧川ハ追散され猿面冠
者ハ美濃尾張伊勢国よで十分ハ手を入れ飯
参リルハハ後悔臍をかむ共其甲斐ハるまハ賤
嶽ハ籠りたる菜山修理亮羽田長門守ハ云ハ是
弟ハさゆハ共今ハ御子の柴田三左衛門勝政を
て押へさせ堂木山ハ備たる木村峰須賀等をハ金
森五郎ハ入道ハ押へさせ小川土佐守ハ備ハハ
見但馬守をさハ向かき盛政拜郷五左衛門宿屋七

八月己八編卷十一

二

左衛門水野權兵衛并小弟共を引率して中川瀬兵衛が籠りとる大岩山へ罷り向ひ一時攻め攻破りしべし高山右近が陣へハ徳山五兵衛原彦次郎不破彦三三人めて押へめ匠作ハ旗本勢を後陣とあり權六勝久ハ前陣を許しめハ一同攻めし氣色を見せしハ若々ハ籠りとる猿が手の者持場々々を氣づかふてかの約束の相互ハ救ひ救ひをれんとの手配り忽ちハ相違すべしその間ハ盛政中川を追ひ落し中づくハ一陣破れて殘黨全りらずとハ本文中ハ大岩山とハ攻抜ハハその餘の若々ハ恐怖して攻さるハ逃去りしべしあり然

らバ直ハ安土ハ参向し若君を守護し奉り五畿内小向て合戦をいどむ程ありハ誰ハ我らハ向ふべきその處へ猿面冠者ハ歸り上りハハ前後より挟み討て是をうち破り猿が首を見んと三十日の外へハ出ゆをハ其外の上方侍ハ氣色次第風ハあびく浮氣武者これりを静めハ何の手段ハよの入べきや今宵の軍ハ天下の落去時ハ得がとく失ひ易く猶豫ハ後悔のをもりあり思慮ハ分別ハ入るハと手ハ取得とさるハとく計らひしハ柴田勝家思ひかへし若武者あれども度々の手かりも有り北国ハ一人當干これハ右ハ出ふりのあ

さ盛政ありさらバ彼ハ任せて一當りてんと思ひ
定め盛政ガ謀る処よと小すど老く聞へとり我由
若き時ハ左サリ小こそ振舞つれ但ト中川ガ砦ハ
向ハ攻落すと叶も共面々の武勇の足ざる処と
云べかりず急ぎ引返して後日の勝負を待たふべ
し血氣ハ中サリて技ガケすべかりず勇氣をい
みて深入するを今日の軍ハ柵ハ手を加ケしを
りも日比の首と思ふべしと下知しはれバ佐久間
玄蕃元大ハ悦喜し山路將監を伴ふハ我陣所と
一行市山へ立戻り彼此用意ハ及び諸物頭以下を
ねく小兵糧つかもと馬ハ飼をつけその一ち思ふ

子細りれバ十文字片鎌等の短さ鎗ハ持べかりず
とぞ觸とりはふ是ハ中川ガ砦いよと全く成就と
ず然れバ堀越一の鎗りるべしと思惟せしガ由へ
ありと加や

浦庵本ハ四月十七日曉天ハ秀吉長濱を立て同
日亥刻大垣ハ著陣し翌日十八日の早天ハ氏家
稲葉の勢を以て信孝の御領をめぐく放火し
り十九日ハ岐阜ハ至て押寄攻落すべしと
の支度小侍侍りし加ども夜半より雨ハびと
老く降出小サのみるれバ其日ハとあり小侍り
かゝる処ハ廿日の午刻佐久間玄蕃元兄弟不破

彦三原彦次郎徳山五兵衛尉上方岩々の要害を
バ丈夫小押へ置余語の入湖を左小あー廻り来
りて志津が獄中川瀬兵衛が要害を打加こみ息
をも呉れず攻ハ音飛脚到来セー加バ秀吉かど
ろさ由あめを度さてハ大利を得ると思ひの目
加早あるべきを云々とりり
佐久間玄蕃元盛政諸方の手配を定りけるがまづ
賤が獄の押へハ柴田三左衛門尉勝政を大將と
し小原新七安彦弥五左衛門以下三千五百餘人
あてさし向とり又蜂須賀彦右衛門父子木村小集
入佐が成る所堂木山の岩をハ金森五郎八入道原

彦次郎をさし向小川土佐守が備へハ安井左近水
野助兵衛をさしむけ堀久太郎秀政が岩へハ浅見
但馬守を大將としてさし向山路將監を案内者と
あして先陣小立せその次小不破彦三以下勝りと
る侍をかり三百餘人高山右近大夫長房が陣を押
へて操出せり其次小佐久間玄蕃兄弟の勢ハ旗本
よりの加勢を加へ四月十九日の宵より賤が獄の
山中へさしあしはるハ佐久間が組下の二宮勝
助と云老功の者りはるが玄蕃小向ハ中川瀬兵
衛尉ハ勇猛世小許されハ大將あり敵を岩小引受
て岩をかりを取れハと防戦しハよ由居るあり

味方の足並小心を舟少しも乱るゝと見る多りバ
切て出追拂とんと働らくおらん折しも味方踏こ
をへ者ぞ一り一り其隙小開道より中川後陣
へ切かゝり未成就の若へ火をかりて操立とらバ
瀬兵衛い加小猛ととも前後左右より攻とらんハ
ハ短氣の中川より一陣に進んで戦ふるり其時
味方引かへく無二無三の切りあひけりバ清秀
を討取んとハ安加るべいと謀りけるを玄蕃さく
より大の悦びその謀よと小神妙あり我も左方
の思ひ舟かども事の多くて漏れとり其方その
手を引けよとて神戸兵左衛門佐久間久右工門

安次同源六實政の七百餘人を引分けて中川後
陣を心ざし忍び入時分ををかりて火を加くべ
其上高山右近大夫が若より援兵の為出向ふ
りバ合戦すこぶ難儀小及ぶべし然らん時の為
とて徳山五兵衛小七百八十餘人をさし添玄蕃ハ
中軍おりりて拜郷五左衛門を先立浅井吉兵衛
宿屋七左衛門を左右小備へさせ水野權兵衛を後
陣おるとせ其勢三千餘人馬の轡の七寸結賤ヶ嶽
の峯を下りおか下り餘吾の湖邊を公方山の麓
へおしおをす然る小賤が嶽の菜山修理亮が手の
池田仙左衛門太田半八が馬取共麓お流るゝ小清

とんと宜敷軍法と不存いそご當方へ御入始終
の勝を專と被成り半こそ御忠節ふるべけれと
はうちりたる小中川瀬兵衛ハ敵の景気を見く人
數死を定め防戦の支度をあし用意取中ありしが
来山が使者来りつと聞く何事ふやと思ひふがら
速に對面し使者の口状を聞えり御懇者の条先
以て辱く存い知さぬ如く當峯の要害よろし加
らび普請いまだ成就仕らば加様の所は楯籠り大
敵を引受しと危ふきと計りかくい但筑前守ふ
らば如是所ふても防戦いさしとんと存されば
あそ高山右近大夫と某をこの湖山の辺にこめら

れていあり然るを某一人この所を引退いたんこ
と侍の道とぞんせど筑前守の心の底もなづり
くいへむ御口状は従て御峯へ引取がとくいこの
旨をもつて修理殿へ詳ふしとといひきて中川瀬
兵衛殿好むとあろの紺糸おどし同し毛の十王頭
の兜を取猪首小著あし大身の鎗の刃廣あるを
小侍ふかつがせ旗かしたる馬ひらせその身ハ
床机ふかりて立とりけり来山へ使ひハ中川瀬
兵衛が返答をきく天晴か大將うあ誰まもかく
こそいひとけれと感心しつて立かへりかくと告
ぐまば修理亮長門守こハ口惜や口状とがふとり

いふおも其若要害何く防ぐとよりのありけま
バこれへ引いきていわれて然らばその意は從が
ぞんと我等もいそ中川何とぞ從ふべき死あり
たり死ありたり此の若の寄手はよし我等がから
お及を御入あれやといひあらば千おひと
おもひ返しもまべうりけるものをと兩人ひと
くためいき継ぎてかり合ひ使者おむかひ大儀
あれども今一度高山右近大夫が陣所へ馳むらひ
越前勢雲霞のごとく寄来りて定めてその若へも
取うけ可申は但其若ハ味方を離れ連ぎの若も
程とやくいそれおて合戦心元あく覚は此表へ

も大勢罷向ふと見えゆハ加勢を出しはとんと
も叶ふもくく一刺も早く此方へ御入りは中
川瀬兵衛へも其よりつ加をいよとせと云ひ
解て出立しと使者高山が許に至り口状をのぐ
あつら高山聞て御口状の趣つぶさ承り何
さま越前勢出張の体に見受け必定味方を離れて
普請もいよと整をれ某が若并中川瀬兵衛が若
へ取かけゆと見えゆ夫ゆ因て夫それ手配も仕り
事ゆ然るところ此若ハ要害悪し合戦難儀お
るべし大勢おて要害もよく合戦も樂あるその御
若へつはみ入りとの御懇志ハ辱くゆと由筑

大勢記八編卷廿七

記

前守かくの如く引放しとる若く右近参れと下知
せりれしゆありかきしゆあをさ処と申存せし
向ひしゆをれ其時かきしゆのと申れと存しハ
ハ断りて御一所の籠り可なりのを何氣なく受取
ていハハ筑前守のさし置あく若を明けとハ叶ひ
しゆありさめくハ但し是式の心得もあふ右近大夫
と思し召れての御戯れ御使者大儀あり一獻と
し度ハハ共物前して万事とのハハさばとて著
たる羽織を脱て使者ゆ与へその身ハ馳廻ハりて
防戦の手配りをあしさり承け引く氣色もあし
夜もすしゆ明四けハ越前勢大岩山の麓へ押よせ

大層言ハ多ク...

九

関をどつと作りしれハ山谷のひびきと駭し中川
瀬兵衛清秀あひて期しとるもれハ更におどろ
くいろもあし三千餘人を引分ち持場々々をよく
固めしゆいしゆのハ弦くひ若き矢束とさして膝
お置き鉄砲うつしゆのハ玉薬をこみ入筒先を狭間
お配りて待かけし北國勢の先陣拜郷五左衛門
まつ先お進み士卒を下知して近々と寄かけし鉄
砲一志さし打やいあ堀下お上り舟んとせし処を
若のうちお見すまし中川瀬兵衛時分ハよさぞす
ハ切ておみせよと下知しつれ待ゆよりとるし鉄
砲を一度おさつと射出し打出しれハ沓の子を

大層言ハ多ク...

九

うち如く魚鱗ありび北國勢矢庭の六七
人の打たはさるれば先に進みし勢ども少
て見えゆるを大将拜郷五左衛門尉久盈
鞞かさ小立上り是むありの若一ツを攻
め入りて攻落し得ずハ何とて故郷へ
面を向くべきぞ爰はて死や者どれ
せり立く下知しれれば入替りて北國
勢面もぶらぐ二百餘人兜の志ころを
傾けて攻めく若のうちありも爰を先
途と射り放ちかけて防さられバ寄手
あそ五十餘人うとれて引さるりぞ
拜郷五左衛門走りよるり味方をす、
先こめかへく打立し加ハ北國勢すぐ
小堀の取付曳々聲

を出して攻むるを見く中川瀬兵衛真
先小す、み柵門を押しひりさ千餘人
鎧の徳先を揃へて突て出る北國勢
これを見て若の大將中川瀬兵衛あり
我討取て高名小せむやと火水ありて
切あゝるされども瀬兵衛ガ形勢猛虎
のりれて群がる羊をかす如く一鎗
突てハかけ倒してハ突ふせ又廣の鎗
の目み加バす流し血の紅ハ秋の紅葉
の散るに數十人をうちぬる扇開て
うちつ加ハ北國勢の其中ハ我と思
えん者ありバ切く出あへや中川瀬
兵衛尉清秀ありと名乗つ、手綱か
ひくり馬止直し去ハ息をぞつぎ居
とり拜郷

五左衛門これを見て望む所の中川瀬兵衛引包んでうちとれと下知しれ共引立とる勢あり助ハ尺今の手並ハ見とり右往左往ハ散乱し更ハ耳ハもきく入れず蜘蛛の子を散すが如く逃去とり拜郷一入ふみ止まり中川勢ハ切てあがり鐘を合せける中川勢もこれこそ先手の大将なれと目小加けしうハ前後左右より揉合ひせりりハ戦ふとり瀬兵衛尉これをみて柴田が家ハ拜郷五左エ門尉とハ北國勢の随一ありいで打取て手柄ふせんと例の又廣の鎧をまごまごうくとうちあうく馳せ向へハ拜郷が侍ども主を討せく加あをりと馬の

前小加け塞がり中川ハ向ひく軍すれハ瀬兵衛大音りげ面倒あり北國武士名もここへぞる其方共幾百人うち取とりと何せんそのけサつと罵りく突さかくれば五左エ門尉も中川を討んと鎧とり直してかけ向ふ中川瀬兵衛ハ勝ふのり北國勢の渦巻て扣へとる真中へ面も振ず走り入り無二あこ無三小攻しうハさし由小猛さ五左エ門尉終りうち負けこの手すぐハサぶれんとせり処へ大将佐久間玄蕃允盛政一陣ハすくみきたありの共軍ハかくこそすれ我を手本ふせよとよバそりくハ尺りよりの金さん棒をうちあうく中川

勢の矢面小立りのを前後左右小うちとほし切
とほし馬のりよりして戦へバ加ちほしと中
川勢思もぐ四方へ散れし立足者ころぬそあへを
立りふり佐久間勢ハ何れも徳長の鎗のそあへ
て鎗先をそろへく叩き立つるほど小中川勢りり
返さんとあせし加ども返し得ずすむ小敗走ん
とせしところへ瀬兵衛が弟洲之助同どく小右エ
門くを破ぶられくハ加あそしと一所小踏みと
とありて戦ふをみく引さかりと中川勢氣を
そげありて立とびあり一足も引る引くといさ
りりひ切れとも打てどもりのと加ずとせは佐久

間ガ勢おそりかくりく息をもつかげ打ちすへ
うちすえ切りかかれバ拜郷五左衛門取て返へ
入りみどれてぞ戦ふと北國無双の打者達者
上方あく音おさこへ一各誉の鎗と合ふてハ加
れに加れてと又一所小揉みりさよ天帝修
羅の闘争もかくやと思ひきられと佐久間ハ若
く勇めるうへ小勝家小誓ひ詞もり是非小中
川を討たらんとひりけバ中川ハ又この若おて
命をすてんと思ひ切と軍あり親うとれても子
助らず主うとれバ郎等ハ主の死骸をふみ越へ
ふみこへいどみりらそふをげとさハよふ目ごよ

太閤記八編卷之廿七

志く見えたりなり... (Faint handwritten text in vertical columns)

重修真書太閤記八編卷之廿七終

